

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

森 口 光 俊

〈論文概要〉 Advayavajra著「Kudṛṣṭinirghātana」(悪見破斥)所収の“Ādikarmavidhāna” (初業の儀則)はAnupamavajra著「Ādikarmapradīpa」(初業の灯)と、その大概主旨を一にする。Advayavajraは「我はこの初業(の儀則)を書き、初業を詮することを説けり」と言う。当稿はこの両者が同一人物であろうことを次に従って検討する。

- I. KudṛṣṭinirghātanaとĀdikarma
- II. PañcatathāgataとGurumaṇḍala
- III. Anupamavajra著「Suviśadasādhānopayika」

I. KudṛṣṭinirghātanaとĀdikarma

(a) Ādikarma (初業) とは

Advayavajra(以下ADV)著「Kudṛṣṭinirghātana」(悪見破斥。以下、KN)^①は“Ādikarmavidhāna”「初業」即ち大乘密教徒の基本徳目と行為に係る「儀則」に基づいて、この初業を否定する見解：「悪見」を「破斥」せんとするものである。悪見破斥論において初めに「初業の儀則」があった^②。KNはこの儀則の前後に「悪見破斥」を論じて、「初業」が^③ 有学の者、無学、在家の菩薩、風狂の徒^④を問わず仏教徒たる者の必須の実践徳目であり、日課としての業(特に在家の菩薩のための)であることを教詮するのである。

「初業」の内容事項は次の如くである。一は大乘密教徒たらん者、必須の実践徳目(持戒etc)、二は、その者(在家の菩薩を主とした)の日課である。

I. 三帰、三竟、八斎戒、五戒、十善業の受持

II. 日課

A. 1. 早朝の起床、洗顔等

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

2. 念三宝、結護、定慮、持誦、ナーマサンギーティ読誦三返
3. ジャンバラ神献水
4. 施餓鬼供養
5. 念四無量心、浄地、造マンドラ
- B. 6. 本尊観：五仏の観想 (Munimaṇḍala)
7. 香華供養
8. 三帰、懺悔、発菩提心
9. 菩薩としての誓願^④等
10. 発遣 (以上五仏マンドラ供養)
- C. (1) マンドラ讃 (Muni=Guru=Meru-maṇḍala)
- (2) Guru師 (金剛薩埵：持金剛でもあり現実の導師でもある) への
供養、信施等について
- (3) 諸種の供養の対称と読誦経について
 - ① 仏菩薩の画、像、經典
 - ② 軀仏とその造作次第
 - ③ 泥塔とその功德
 - ④ 般若経、六門ダラニ、普賢行 (願讃)

(以上は日課に係る本尊観の意味と供養の対称等に関する説明)
11. 随喜、廻向
12. 施餓鬼作法、乞食の意味と施主への謝徳
- D. 13. 行法了後の時間；自由に、そして善友等との語らいに過すこと
14. 夕勤行
15. 睡眠、マントラを誦しつつ瑜伽の眠をとる

以上がKNにおける「初業」の梗概である。内容は「初業」と称するように大乘密教者たらん者の根本律と、それに従う初心の「在家の菩薩」のための日課業を説いているものであって、本尊観：「Munimaṇḍala」(後述)を除いて特別な秘儀次第を教示しているものではない。時代の眞摯な行学者にとっては当然のこととされる徳行である。

ところで初めに述べた如く、この「初業の儀則」はAnupamavajra（以下、ANV）著「Ādikarmapradīpa」（以下、ĀP）と大概主旨を同じくして、その要略を成しているものである^⑤。このことはKNが「初業の儀則」即ちĀP（の要略）によって成っていることを意味する。著者名に従えば、ADVは先行するANVなる著者の主張する初心の「在家の菩薩」のための「初業の儀則」の重要性を新めて論証したことになる。

しかしながらADVはその論KNの奥書相当偈に次の如く「私がこの初業（の義則）を書いた、初業を詮することを説いた」と言う。

38) 御名からして、虚空を胎藏されるこの方は、中道の義理に通達し、初業に専念しておられ、（常に、衆生の）摂受をなさる。

39) 金剛座より来たれる御方、聰明なる生れの、正しき意樂を持たれる御方、かの御方に（深く）おたずねして、我はこの初業の（儀則）を書きたり。

40) ここに、まさに、虚空を胎藏せる御方におたずねすることにより、わずか若干の句をもちて、初業を詮することについて我は説けり。

（こを聞く）者は、罪という眼翳を除き煩惱を破して、（初業の）修習により久しからずして無垢の覚を悟らん。^⑥

ここに言う「初業を書いた」とは「初業の儀則」即ちĀP（要略）を指し、「初業を詮することについて説いた」とは、KN即ち論証の部分を指すと考えられる。「虚空を胎藏せる方」、「金剛座より来たれる御方」の「御方」とは、ビクラマシーラ歴代の賢人、或はADVの直接の師（Anupamavajra etc.）を意図するものではない。ADVの著作集（以下、ADV.S.）所収の他の著作における用例や、思想的立場、或は時代の無上瑜伽各派の相承系譜における派祖等の問題に鑑みて^⑦、「御方」はNāgārjuna, 釈尊を指している言葉であると考えられる。ここでは大乘密教徒として必須の徳目と、時代の要請としての日課業が伝来の法勅であることを主張するための、そしてADVの行学者としての真摯な態度の密教的表現なのである。

次に述べる如く、ADVは自らが先きに著したĀP、これを新たに教詮すべき

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

何らかの必要があって、その要略「初業の儀則」に基づきKNを著したのである。ADVとANVは同一人物でなければならない。

(6) Kudṛṣṭinirghātana成立の事情

先述の如くKNに「初業」は有学の者、無学、在家の菩薩、風狂の徒を問わず実践すべきものとされる。同書の次偈は

(7) 全ての瑜伽者によりて、説かれたとおりに初業は修さるべし。なんとならば、空性と悲と不可分となっているのが悟における智と認められるのであるから。^⑦

ADV.S.所収「大乘に関する二十頌」^⑧に同出して、「初業」を大乘瑜伽行における「空悲不二智」を得るための根を為す徳行であるとする。

ADVは「清浄なる初業」(suviśuddhādikarma)^⑨とも称して「初業」を「全ての瑜伽者」、「風狂の徒」においても必須の徳行であると主張しているのである。

ビクラマシーラ僧院にあってADVと互いに師弟の間にあったアティシャの言及によれば、ADVには大乘密教徒の基本徳目；三帰、五戒、十善業、菩薩の誓願等を護持し、日々の行為を律して菩薩行に生きるという規範の確認を必要とする事情があったと考えられる。

羽田野博士の「The life of Aīśa」(Tib No.7043) による論考によれば^⑩、

①アティシャはADVの三著「Kudṛṣṭinirghātana」、「Suvapnanirdeśa」^⑪(夢解説)、「Māyanirukti」^⑫(幻解説)が、ラトナーカラシャーンティの論難に対する反駁として書かれたと言う。

中観思想を厳しく批判したというラトナーカラシャーンティのADV批判の具体を詳にしないが、「Māyanirukti」に次の如く言う。

(4) 汝は〔幻が〕虚偽たることを忘れて、何と幻について常と説くことよ。法界は不生である故に、断見にもまた陷ることはない。

(7) 足を伸ばしている〔女性〕を捨て、我慢等の妄分別を投げ捨てて、場所にこだわることなく安住した瑜伽行者は行を行ずべし。

- (8) 食物と飲物の味を得て、清らかなことを言葉で叫んでも、然しながら、行を行じようとししないものは、菩提の器ではない。
- (9) 真実を言葉で語る人は行をも喜ぶが、知と行の完成を備えた人は得難い。
- (10) [瑜伽行者にとって] 大地が寢床であり、[あらゆる] 方位(空間)が衣服であり、与えられた施食が食物である。無生法忍は悲愍と無功用とをもたらす。
- (11) 人を支配する諸法もまた、行によって支配される。その結果がこの世において見られるが、その限り、[それが] 無上[な結果]であることは言を俟たない。

「Svapnanirdeśa」には、

- (9) 更にまた、汝は[夢が] 無住であるという考えが覚者の最上なる全財産であると、正しい師の知識によって努力して、また特に行[をなすこと]によって知れよかし。

アティーシャの言の如くであれば、この両著の「汝」はラトナーカラシャーンティを指していることになる。言葉で語り、論ずる観念的な学解に対して、実践的「行」の優越性を述べ、ADV自らの禁欲的梵行と無執着の「行」の本質が主張されている。

②同じくアティーシャによれば、ビクラマシーラ寺院からのADV追放事件があった。ADV達のVajravārāhiに系る儀式<Yoginī, Śakti, Dam-rdasを飲むことetc>、無上瑜伽行に関する問題から、「アティーシャ下の僧達？」によってADV追放が為され、このことについてアティーシャの反省があったとする。所引本文に？とある如く、「アティーシャ下の僧」とするには疑問がある。何故なら、同博士論考¹³によれば、アティーシャは「アヴァドゥーテイパ(大)」<ADV>に長年に渡って師事し、また「瑜伽・母たる奈枳尼と聚輪」を修めて、彼の行は「ヘーヴァジュラ尊をはじめ、無上瑜伽・母に特徴的なもの」とされており、ADVと行学にわたって師弟として密接な関係にある者であるからである。「アティシャ下の者達」の如何は別として、この出来事

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

は、後にアティシャ自身においても問題となる無上瑜伽・母密教がはらむ時代の象徴的事件であった。即ち、「大印の行」の性的表現と形式と実行が、「比丘や菩薩の学処を破る^④」行であるか否かを問われた重大な出来事であった。

①、②いずれもADVの「行」に係る疑義である。これらを通して次のことが考えられる。

ビクラマシーラ寺に係るADV活躍の時代、ADV自身の行学に対する批判と共に、指導する弟子集団の大乗密教徒としてのあり方、戒行、風紀に関する批難が作された。弟子集団はビクラマシーラ寺に限られたものではなく、外部のより広範の在家の者達を擁していた。時代の中で彼等は精神と行為のいかなる有り様によって仏教者たり得るのかを（おそらく大乗：密教化する声聞比丘達、在家、サンニャーシン）問うていた。その解がĀPの「全ての瑜伽者」（KNの語による）によって修さるべき「初業」、即ち仏祖からの法勅としての三帰、五戒、十善等の大乗者必須の業と、最終的には持金剛、成就者と成る「初業の」Guruマンダラの観想、師への供養、信施等の日課業であった。

ラトナーカラシャーンティ、アティシャの疑義に先き立って、ADV自ら持し、書したĀPの精神に従って弟子集団を指導して来ていた。そうした動向にあって、より専門的な高度の楷程の行、「無上瑜伽行」に係る性的行法^⑤のあり方が①②の疑義として顕われたものと考えられる。

アティーシャの反省があったと言われる如く、眞実、持戒の瑜伽行者であるADVは、この問題に答えるべく「Māyamirukti」、「Svapnanirdeśa」をもって、自らの持戒と行を被歴し、弟子集団を新めて諭すべく、自ら行じ^⑥、自ら既にかけていた「初業の義則」：ĀPに依って、その要略に、KN即ち「悪見被斥」を加し論じたのである。

ADVは、この疑義の問題点に関して、他書に次の如く言及している。

(22) [精液の形での菩提心は] 男性器内であろうが、その先端に於いてであろうが、カパーラに落ちたものでであろうが、また[女性器の] 中に於てであろうが、眞実とは認められない。[眞実は]師の口か

ら〔のみ〕知られるのである。

「灌頂説示」^⑰

(5) この様にあらゆるものは唯だ縁によってのみ〔存在して〕いるので、〔あらゆるものは〕無自性である。瑜伽行者がそれ（無自性）に住していれば、サンヴァラ（禁戒）を逸脱することはない。

(8) 空性（女性）と悲愍（男性）の合一は、自己の判断に基づいて規定されるべきではない。空性を明らかにする者は、本来、双運である。

「双運明説」^⑱

(5) “外的な二根の交会” という牟尼の説示があるが、それは内的なものを理解させるために〔あるということが〕諸々のタントラに於て明確に知られる。

「大樂明説」^⑲

(C) 写本Ādikarmapradīpaの奥書について

ĀPは西蔵訳を欠いている。梵文写本、奥書に作者ANVについて次の如く言う。

デーヴァバーラ（王）の建立された僧院、吉祥なるビクラマシーラに住されし方、吉祥なる善逝の教えの唯一の標章、高名にして二人となき賢明なる方、持戒に優れ、久しく梵行を行ぜられし方、法の授与者、寂靜の知恵を持てる方、その方の無比なる教説が存る、その方により（この）初業（の道）は説かれた。

この初業のともしびは、まさに灯火であれ、

虚空の広がり限りまで、教えの光たれ。

初業のともしび終わる。（これ）アーチャルヤ無比金剛の著作なり。吉祥あれ。紀年218婁宿の黒月第八日、吉祥なる持明者ヴァルマソーマによって造られた吉祥なるヤショグラヴァルマの大僧院の住者、金剛アジャリにして、吉祥なる釈種の比丘が（書写せり）^⑳。

ĀPはネパール紀年218 (AD.1098) に書写されている。ANVについて、ビ

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

クラマシーラ僧院に住するĀcāryaであると言う。「吉祥なる善逝の唯一の標章」(śrīmatṣaugataśāsanaikatilakaḥ)、「高名にして、二人と無き賢名なる方」(khyāto ['] dvitīyaḥ kṛti) などと称讃しており、「無比なる陳述より造られたもの(著作?)が残されている」(adeśakaro babhūva' nupamaḥ) とも言う。又、このANVの讃嘆者、即ちĀPの筆写者は「金剛アーチャルヤにして釈種の比丘」(Vajrācāryaḥ śrīśākyabhikṣuḥ~)〈名を欠く〉であり、ネパール現存の僧院名、Bu-Baha：略称Yaśodharamahāvihāraの住者である。

この奥書と書写の年代から次のようなことが考えられる。

①ANV著、ĀPはA.D.1098年に書写されているのであるが、ネパール、チベットに著名なADVが974 or 986~1065 or 1077年の人物であることに従えば^②、このĀPは、ADVの死後およそ20-30年の間に書写されていることになる。両者の近い年代からして、ĀPの作者ANVは、KNの作者ADVと同時期に同じビクラマシーラ僧院に関係するか、住んでいたと考えなければならない。そして、ANVはネパールの僧ĀPの書写者によってこれほど讃嘆されいながら、ADVに比して全く無名であり、現在までその歴史的資料も当稿に掲げる以外に見出されていない。

ĀP書写の11C.末、同時代直前の著名なADVが、同じビクラマシーラ僧院に住していた別人の著作；時代における仏教徒一般をも対称として書かれた密教の菩薩行の提示、即ちĀPの綱要書「初業の儀則」を「私が書き、論証した」と公言するということがあるであろうか。教証として引いているものでも無い。おそらくそのようなことはあり得ない。

②ADVの弟子達は、ĀP書写の頃以前おそらく11C.中葉に、ADVの思想「大印の教義」等をネパール、チベットに広めている。ADV四大弟子の一人Va= jrapāniはその代表であり、四大精神子の一人Śīlabhadraはネパール人である^②。ĀPは彼等によってネパールに、彼等悉知 (ADV=ANV) の師の尊称名 "Anupamavajra" 名で伝えられたと考えられる。

ADVの弟子達の活動もその潮流を醸成したと考えるが、時代のネパール仏教は、ĀPの書写者(名)が象徴するようにその変動期にあった。

ĀPの書写者（名）は「Vajrācāryaḥ śrīśākyabhikṣuḥ～」である。金剛アジャリにして釈種の比丘、即ち、大乘密教者であり且つ、声聞乗の比丘なる者が書写している。この標称は逆順の場合もある。「声聞比丘でもありアジャリでもある者」と言う。両標章は、密教者アジャリが声聞の戒行具足を誇示するための併記ではない。ネパール仏教の変容、声聞乗の仏教から大乘密教への変容を示す標称なのである²³。

大乘密教化は独身比丘の妻帯化、或は妻帯僧化（密教の僧）を促したにちがない。それは独身声聞比丘所属寺院の官理上の問題、三宝物の私有化等の問題として、ネパール仏教の混乱と社会的変容をもたらしたはずである²⁴。

「Vajrācāryaḥ śrīśākyabhikṣuḥ」の標称を有する者が書写したĀPは、ネパール仏教社会のかかる変動期にあって、大乘「在家の菩薩（僧）」、密教僧（Vajrācārya）としての基本的理念と行為の形態を提示するものとして、書写者自身にとっても自己の問題として書写さるべくして写されたとも考えられる²⁵。

ĀPはADVの弟子達によって、彼等悉知の尊称“Anupamavajra”なる名称でネパールに伝えられた。“Advayavajra”の「Advaya」はADV.Sによる限り「空悲、般若方便：不二」の意味である。ĀP奥書の讃嘆、「Anupama」（無比）、或は「Advitiya」（二人と無い）の意味ではない。しかし、ĀPの書写を自己の問題として捉えたであろう書写者において、著名なる尊師ADVが、奥書の如く、「Advaya」≡Advitiya=Ekatilaka=「Anupama」、「Anupamavajra」即ち「Advayavajra」の尊称として受容されたとしても不思議はない²⁶。

ネパールの後述「Caryāgītasamgraha」（行歌集）には、ADVに帰される7歌と、ANVの1歌「Bhānumaṇḍala」なるHeruka讃の短歌がある。「行歌集」に両名が伝えられていることについて解を得ないが、おそらくこれも上記ĀPと同様の伝承であると考えておきたい。

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

II. PañcatathāgataとGurumaṇḍala

(a) ĀP、KNのPañcatathāgataとGurumaṇḍala

ĀP、KN両者においてADVの行学との関係、主特質を示す事柄は、その本尊観の内容たる「Pañcatathāgata」（五如来）と「Gurumaṇḍala」（師のマンドラ）＝「Munimaṇḍala」「牟尼のマンドラ」＝「Merumaṇḍala」（須弥山のマンドラ^②）である。当問題の理解はĀP、KN広略の成り立ちの故をもってĀPによって作される。

ĀP、KNにおける「五如来の形相」は以下の如くである。ĀPは阿閼如来を中尊とする五如来と四瑜伽女についての種子、身色、印契、座、方位、四大（界）、持物を観想する（ビルシャナを除いて他の如来名、瑜伽女名を記さない）。

KNは、これら五如来の形相を観じて、四瑜伽女の記述を欠いている。ĀP、KN共に五如来は僧形をとるとし、ĀP、金剛薩埵は菩薩形である。ĀPの五如来（名はKNによる）と四瑜伽女の形相は以下の如くである。

五如来、四瑜伽女	種子	身色	印契	座	方位	四大(界)	持物
阿 閼	hūṃ	青	触 地	日輪	中		
毘 盧 遮 那	Om	白	覚 勝	月輪	東		
宝 生	trāṃ	黄	施 願	日輪	南		
無 量 寿	hriḥ	赤	禪 定	日輪	西		
不 空 成 就	khaṃ	緑	施無畏	日輪	北		
(仏 眼 母)	lāṃ	白		月輪	東	地	輪
(摩 々 枳)	māṃ	帝青		月輪	南	水	金剛杵
(白 衣 母)	pāṃ	赤		月輪	西	火	赤蓮華
(多 羅 母)	tāṃ	黒		月輪	北	風	青蓮華

問題はこれらの五如来、四瑜伽女がいかなるマンドラ像として観想供養されるかということにある。ĀPは次の如く言う。

「次に、須弥山の島々を〔前〕と同様に観想し、その上に本尊を〔観じ〕、指示通りに供養すべし。あるいは(ca)五如来を(観想)[供養すべし]®。」五如来等の形相は「須弥山」頂の中央と四州に於いて観想されるのである。本尊とは「金剛薩埵」である。

ĀPは五如来等、その総体としての「金剛薩埵」を立体的に「須弥山のマンダラ」像として観想するのである。このことは、須弥山中央に於ける五如来の中尊「阿閼如来」が、同時に本尊「金剛薩埵」であるというダブルイメージと共に、須弥山にある五如来等の総体として須弥山の当体が「金剛薩埵」であるとする観想を可能とする。

ĀPは、図像学的には須弥山という立体化によって、五仏の総体第六仏®(金剛薩埵)のあるべき位置を提示しているのである。

この「須弥山のマンダラ」をĀPは「師のマンダラ」とも「牟尼のマンダラ」とも称している。一は、師(Guru)は瑜伽を成就して「一切諸仏と等同なる者」、「持金剛」である者、即ち「金剛薩埵」なる者であるからであり、一は、かかる「師のマンダラ」を建立することが「牟尼」の如く福智二資料の円満に適うことによる称である®。

金剛薩埵なる「Guruのマンダラ」は次の如く観想される。

次に、〔曼荼羅の〕中央に、四角で、八峰にて飾られ、東南西北の側面に、〔順に〕銀・瑠璃・水晶・金がちりばめられ、四宝から成るところの須弥山を想うべし。その〔須弥山の〕中央に、種々な宝石をちりばめた獅子座〔があり、その〕上に、開敷した八弁の蓮華を〔想い〕、蓮華の胎に、種々なる装身具で飾られ、金剛薩埵の外観をした吉祥なる尊き師を観じる〔べし〕。次いで、須弥山の東方に半月の形をした白色の東勝身州、南方に三角で金色の南瞻部州、西方に円形で赤色の西牛貨州、北方に四角で黒色の北俱盧州を観想し、このすべてはそれぞれ、ルビー、サファイア、瑠璃、エメラルド、ダイヤモンド、真珠、珊瑚で満たされていると想うべし。®

KNには五如来の観想において「金剛薩埵」の記述を見ず、「須弥山のマン

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

ダラ」についても記されない。しかし、上記「牟尼のマンダラ」偈、Guru信施の偈の記事をもって、ĀPのこれらの観想に従うものであることは明白である²⁹。

以上ĀP、KNは五如来、四瑜伽女と須弥山頂の、そしてその当体としての金剛薩埵を説いている。その記述は簡略であって両者の関係、性格についても上述以外に理論的説明を見ない。

(b) ADVのPañcākāraとGurumaṇḍala

ADVは「Pañcākāra」(以下、PAN)³⁰、「Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa」³¹、「Sekatātparyasaṃgraha」³²等の著作を残していて、順に、五如来の形相と金剛薩埵、五如来と金剛薩埵の関係、阿闍梨が弟子に金剛薩埵位を授けるための秘儀、六灌頂次第の主旨を説いて、五仏から第六仏への展開に係る行論に大きな関心を示していることが知られる。

彼は「父母両系タントラに通じた者」³³であり、生起究竟の両次第に通じている³⁴行学者でもある。頼富博士はADVの「PAN」の法数的体系の具体と思想を究明されている³⁵。同書によって次節にも関係するADVの諸特徴を略記すれば次の如くである³⁶。

- 1) 無上瑜伽階梯の密教五仏、および第六仏としての金剛薩埵ならびに五明妃を説く。
- 2) 「秘密集会タントラ」以降の阿閼等の五仏と金剛薩埵の六尊を中心とする体系を法数表示的に構築する。

この体系は聖俗一致的発想の強い五蘊即五仏説や五煩惱即五仏説を導入して「初会金剛頂経」以降の新たな展開を意図したものである。

- 3) 内容には「秘密集会タントラ」をはじめとする方便・父タントラの思想教義が多く、部族名や五煩惱名等に「ヘーヴァジュラ・タントラ」など般若・母タントラ的要語も散見される。
- 4) 同論は自己の知るところを要約した綱要書である。

同上書に表記解説される五如来の形相等の具体をここに再記しないが、こ

れらによってĀP、KNにおける五如来の形相等について言及しうることは次の通りである。

- 1) ĀP、KNの五仏の形相等の法数的名称体系の記述は、PANのそれに比しはなはだ簡略である。
- 2) ĀP、KNに記される限りの法数的名称、真言（前記表）は頼富解；前記1. に全く同じである。但し金剛薩埵の配偶母尊を欠いて四明妃である。
- 3) 四明妃の種字「loṃ Māṃ Pāṃ Tāṃ」は、PAN、ĀP両者同一である。同種字は「秘密集会タントラ」にも、「要略成就法」、「五次第」にも言及が無いとされ（頼富P.440）出処に特異であるが、関係する次項のANV著「Suviśadasādhyanopayika」、ならびに「Sādhanamālā」所収のADV著、No.251etc[®]に出でて、そのADVとの密接な関係を証する種字である（後述III）。
- 4) 金剛薩埵はPAN. に識蘊たる阿閼に超越する空性（と悲想の合一）者、五智に対して「意」（manas）として配されている（頼富P.437、439）。

ĀP、KNにこれらの思想的解釈はなされていないが、前述の如くその内容からして、尊師Guru、持金剛、須弥山中央の金剛薩埵として五如来等の総体者、超越者を指示するから、ĀP、KNの金剛薩埵もPAN. 同様の性格を有していると考えられる。

以上、ĀP、KNの五如来の形相と第六仏としての金剛薩埵の提示、四明妃の真言の特異な同一性（サーダナマール系）をもって、ĀP、KNはADVのPAN.etcを背景として著されたものであると考えるが、両者の簡略をもって確証とするにいたらない。

ところでĀP、(KN) の「Gurumaṇḍala」（以下GM.）について、ADV.S所収のPANを始めとする諸著作にはその記述を見出さない。しかし、ADVの成就法をも集めて、彼の時代の成就法を集成する「Sādhanamālā」（以下SM）とネパールの「Caryāgītasamgraha」（行歌集、以下、CG）[®]にはADVの著

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

としてGMにおける五如来、金剛薩埵の記述があり、SM所収の他の成就法と比して、その密接な関係を示している。

- a) 初めに、ネパール伝CGは、多数の成就者名を伴う行歌を残しているが、ADVの行歌として7種の行歌を伝えている^②。そのうちネパールに於いてADVの行歌として最も人口に膾炙する一歌が「Madhye Meru」である。未校訂ローマナイズと要訳は次の如くである。

Madhyameru-mahāmaṇi-kanakarājite pūrvavideha jala-jambudvīpe/
 aparagodā(nīya) uttarakuru-bhuvane/
 pañcavarṇṇa pañcajina vyāpiyāre name pañcabuddhaṃ/
 viśvasrijita viśvahita viśvabhūta pañcamūrti(h)/
 aṣṭadvīpānala vahanti jina mānasā/
 harantu bhaya-timira-ghana-ghora rure/
 jāta vedanase ya upadvīpa rā upadvīpa parijāntu jāne/
 svasa ralla upadvīpa cau vidigaṃ bhūvane vā upadvīpa
 śrikhaṇḍa paraśu//
 dvirada vala prāciyanara rudhira yaciya sapta-astadara cum=
 biyāre/
 ava ralla udiciya sayakaṃ cakrā/
 maṇi-kū(ṭa)-nidhi-nikhila vedayanti//
 gurucarāṇa-tribhalasahagati paribhāvanā praṇava paribhavayi
 saptapariṇṛta/
 bhava-jala-nidhi-sakala sentu bhūtam//

世界の中央である須弥山と、その四大八副州に関しての莊嚴、五仏諸徳と帰命による、怖畏、蒙昧、痛苦等から脱るること、Guruへの帰命供養と三密の修習によって、全ての衆生が輪廻の海を渡らんことを祈するものである。

- b) SMにはADVの成就書が三本伝えられている。そのうちNo.17「Sim=hanādasādhana」にはGMの記述を欠くが、No.217「Vajravārahīsād=

hana」とNo.251「Saptākṣarasādhana」には記述があり、同所収の他の成就書No.123 (PP.255-6)、No.206 (P.405) を除いてこれを見出していない。同期の対決者ラトナーカラシャーンティNo.110もADVと共通する「秘密集会タントラ」等に基づく無上瑜伽の教義を説きながらも、その道場観に関してGMに興味を示していない。猶、ADV弟子と言う Lalitagupta, No.128も記さない。

ADV、No.251のGM関係記事は次の如くである。

yām rām lām vāmの変成せる半円、三角、円、四角にして青、赤、白、黄の四大のマンダラを順に上へ観想せよ。その上にSūṃ字より生ぜる四方を七宝、八峰に飾られたスメール山を觀じ、その上に、オーン、金剛より成れる大地よ、金剛の器よ、フーン。オーン、金剛の垣牆よ、フーン パーン フーン。オーン、金剛網よ、フーン パーン フーン。オーン金剛の宝帳よ。オーン、金剛の矢の如き（光線）よ、トラーン シャーン トラーン。オーン、金剛火焰光よ、フーン フーン フーン。これらの眞言をもって金剛の大地等の六種（の結界）を成し、その内に四面の樓閣を出現せしめ、さらにその内に、宇宙蓮華を、六尖の輪 (ṣaḍ āracakra)、金剛、蓮華、輪の列に囲まれたものを觀じ、その内に蓮の端 (Varaṭaka?)のある座を（觀じて）、ラン(字)より生ぜる日マンダラと、日月の変成せる日月のマンダラの合せる中の中央の座に金剛サッタの姿をせる青色のフーンカーラを出現せしめよ^④。

ADVの当成就法のGMに於ける観想は、頼富博士の指摘されるADVへのアーナンダガルバ注の影響^④の可能性に従えば、同注「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現^⑤」には「器界観」としてGMと五仏の座が説かれており、ADVへの影響の別の一証とも考えられるものである。

成就法のGMの観想は、更に特色のある記述を有している。成就者の「身体マンダラ」(kāya-maṇḍala)の修習において、五大、五蘊の守護と共に、六

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

処 (āyatana) の浄化、六尊 (devatā <六薩埵>) 六妃 (devatī <六金剛女>) とそれぞれの六処布置、阿閼の冠 (dharmadhātumukṭini) を付けた五煩惱である五明妃等の観想を作すことである^⑯。これらは次節と深く係るところであるが、成就者—持金剛—金剛薩埵、第六仏としての金剛薩埵像の確立に係ってADVの思考の跡、或は完成を示していると考えられる記述である。即ち五仏から第六仏への展開にあたって、五蘊即五仏説や、五煩惱即五仏説から更に、六根、六境を透過する身体マンドラに関する展開があつてしかるべきである。これらは次節に述べられる。

以上 a)、b) によってĀP、KNとADVの五如来の形相、第六仏金剛薩埵、Gurumaṇḍala (Merumaṇḍala) について考察した。ĀP、KNはADVの第六仏としての金剛薩埵を立てる思想的背景をもって、ADVによって著されたものと考えられる^⑰。

III. Anupamavajra著Suviśadasādhānopayika

ANV著「善明と名づくる成就法」は、梵文を欠いて、西藏訳のみが残されている成就書である。西藏訳に「rab tu gsal ba shes bya baḥi sgrub paḥi thabs」と言い、著者名を「slob dpon dpe med paḥi rdo rje」とする。訳者はViriyabhadra、校正官Rin chen bzan poである。東北No.1891、大谷No.2755がある。

同書は生起次第「Piṇḍikṛtasādhana」(要略成就法^⑱) に基づいた実習書であり、同書の三種三摩地次第に従って構成されている。究竟次第である「Pañcakrama^⑲」(五次第) を含む「六次第」の第一「定寂身次第^⑳」、等の影響下に成立していると考えられる。

五仏の毘盧遮那と阿閼は交替して中尊となる。その両尊といかにして瑜伽し成就者、持金剛となるか。両者の性格を有する金剛薩埵、第六仏の世界をいかにして成就するかを、「身体マンドラ」等の諸種の観想を通して修するところに、当書の特色がある。

修習の次第に従って、尊格名等法数的に掲ぐれば次の如くである。

〔 I 〕 初加行三摩地

1. Om śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako'ham
2. 本尊、毘盧遮那、白色、三面六臂（白黒赤）、二手抱妃、四手：輪・劍・蓮・宝
3. 19尊（名欠）觀想と五行字、ka·ta·dha·ṭa·ḍha·ya·la
4. Om vajrasvabhāvātmako'ham
5. 金剛薩埵、毘盧遮那同一の觀etc、成就者「持金剛」と成る。
6. 六種字：Kṣiṃ、Jriṃ、Khaṃ、Vaṃ (Gaṃ)、Śkaṃ (skaṃ kṣaṃ)、Saṃ (raṃ)
7. 六根：眼、耳、鼻、舌、身、意
8. 六薩埵：地藏、金剛手、虚空庫、世自在、除蓋障、普賢
9. jaḥ、hūṃ、vaṃ、hoḥ、khaṃ、raṃ
10. 六境：色、声、香、味、触、法
11. 金剛女：色金女、声金女、香金女、味金女、触金女、法金女 (chos ky byiṃs)
12. 四大種字：Lāṃ Māṃ Pāṃ Tāṃ
13. 四大：地 水 火 風
14. 四明妃：Locanā、Māmakī、Pāṇḍalā、Tālā
15. 五種字：Brūṃ、Āṃ、Jriṃ、Khaṃ、Hūṃ
16. 五蘊：色、受、想、行、識
17. 五如来：毘盧遮那、宝生、弥陀、不空、阿閼
18. 金剛心語身四歡喜偈 (Piṇḍi <43>)
19. 成就者「持金剛」と成る。三面六臂（青、白、赤）、二手抱妃、四手：金剛（杵）・劍・蓮・宝
20. Om dharmādhatuvajrasvabhāvātmako'ham
21. 六薩埵、六金剛女、六色、六处布置と持物
二眼、二耳、二鼻、舌、頂、喉下
地藏（白）輪、金剛手（青）金剛、虚空庫（黄）宝、世自在（赤）蓮、

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

除蓋障（緑）剣、普賢（白）金剛

色金女（白）鏡、声金女（青）ビワ、香金女（黄）螺、味金女（赤）味
器、触金女（緑）衣、法金女（白）法（輪）

22. 心口身の三不壊金剛の成就

Om sarvatathāgatacittavajrsasvabhāvātmako'ham

Om sarvatathāgatavākvajrasvabhāvātmako'ham

Om sarvatathāgatakāyavajrasvabhāvātmako'ham

23. 五如来眞言と五処布置

頭、胸、臍、（秘処）、両足

Om Hūṃ Svā(h) (Padma) Ā(h) Hā

毘盧遮那、阿閼、宝生、弥陀、不空

24. Om sarvatathāgatānūrāganavajrasvabhāvātmako'ham

〔II〕曼荼羅最勝王三摩地

25. 阿閼を中尊とする五如来、五眞言etc

Vajradhṛk、Jinajik、Ratnadhṛk、Ārolik、Prajñadhṛk

阿閼、毘盧遮那、宝生、弥陀、不空

26. 四明妃、四煩惱、四Antakṛd

仏眼母、摩々枳母、白衣母、多羅母

moharati、dveṣarati、rāgarati、vajrarati

Yamāntakṛd、Prajñāntakṛd、Padmāntakṛd、Vighnāntakṛd

27. 化仏 (Kula)

持金剛：一切如来

毘盧遮那：仏眼、色金女、夜摩天

阿閼：マーマキィ、声金女法金剛女、無能勝、甘露（軍荼利）

弥陀：白衣母、? 金剛女、馬頭

不空：ターラ 触金剛女

一切如来：地藏等

阿閼：普賢

28. 阿閼の自性讃偈 (Piṇḍi <44>)

29. 五甘露の享受

〔III〕羯摩最勝王摩地

30. 滴瑜伽、微細瑜伽、内の護摩、外の浄化、後方便

以上、ANV、「Suviśadasādhyanopayika」(以下、SS)次第に従ってその眞言、法数名目を略記した。SS成就法次第は「三種三摩地説」によって構成されている。これは、瑜伽部密教の要素を残す⁴⁹「要略成就法」(以下、「要略」)の次第に基づくことを示し、1・4・20・22・24の眞言と、18・28偈は「秘密集会タントラ⁵⁰」—「要略」の修習法の基本理念を示すものである。

〔I〕、〔II〕、中尊の交替も「要略」に従う⁵¹。金剛薩埵・持金剛は両中尊の構成する世界を有する性格の者と成るであろう。3. に19尊の観想を説く。内容からして、五如来、四明妃、六薩埵、六金剛女と、四忿怒尊(六薩埵を除いて19尊)を説いていることがわかる。

SSは、従來說かれて来た「五蘊即五仏説」、(a) 15・16・17・23(中尊毘盧遮那)と、12・13・14・四明妃・四大、(b) 25(中尊阿閼)と、26・四明妃、四煩惱⁵²を継承しつつ、「六根・六境即六仏説」を展開する。その特色は7・六根、10・六境を新たに立てたことにある。これにより、8・六薩埵と11・六金剛女を産み出し、6・六種子、21・六色、六処(布置)等の対置を得て「身体マンドラ⁵³」を完成したところにある。これによって、「五蘊即五仏説」から転じて、金剛薩埵を含む「六根・六境即六仏説」を確立し、五仏を超越してその総体でもある第六仏・金剛薩埵(「意」根と「法」境に対応する)の「全、第六仏」としての像を示し得たのである。

「六薩埵」、「六金剛女」について、「Pañcakrama」を含む六次第の第一「定寂身次第⁵⁴」に、六根に配する〈六薩埵〉(SSの普賢を文殊とする)と、五境に五金剛女を配することを説いている。ジュニャーナパーダ流は「文殊金剛」

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

を主尊とする19尊マングラ（父母38尊）であり、〈六薩埵〉、〈六金剛女〉を説いている^⑤。又、聖者流32尊マングラは阿閼金剛を中尊とする五仏、〈五金剛女〉、〈八薩埵〉（SS六尊＋弥勒、文殊）を説く。

聖者流32尊マングラにおける八薩埵について、第六識（意）：第六薩埵から八薩埵への展開が示摘されているが^⑥、SSに比して、五境に五金剛女を配して、六根、六金剛女への展開を示さず、文殊金剛、阿閼金剛を五仏の主尊とすることをもって持金剛としての〈金剛薩埵〉からの更なる展開、変容を示している。いずれにしろSSは、上記諸説との関係の中で、六根・六境—六薩埵、六金剛女に整序する説を提示する展開を見せた書である。

種字眞言について次のことを指摘できる。

6. 六種字は六薩埵それぞれの冒頭字を用いたものであることは明らかである。「要略」には不完全な提示がある^⑦。

12. 13. 14. 四明四大種字は、同じく冒頭字でありĀP、SMに出ずることはGMの項に既述したが（註40）、SMにおいては、五明妃種字として六男女尊（devatā devatī）〈薩埵〉と六処布置との関係において説かれることが注目される（後述III）。

15. 五如来の五種字は五蘊・五如来の種字であり、Hevajra系のものとされる。当種字もSMにあり、そのうちADVの、No.251は、これに基づくと思われるBrūṃ Hum(Hūṃ) Kham Āḥ Hām Hām(?)を六処に配している^⑧。

23. 同五如来種字眞言は、「要略」に出ずるとされる^⑨（PAN, ĀP, SMの五如来眞言Om Trāṃ Hriḥ Kham Hūṃと異なる）。

以上SSの名目種子眞言を掲げてその全体像と特色を述べた。当成就法は「五蘊即五仏説」を新展開して「六根、六境即六仏」説を建て、持金剛としての金剛薩埵像をより明確にしたものである。

ところで従前よりANVはADVであることを考察して来た。「父母両系 Tantraに通じ」、生起・究竟の兩次第に通じた彼によって、第六仏、金剛薩埵、五明妃を説くPANが書かれ得たとされることを述べた。彼の著作集ADV.S

にはPANを始めとする諸作に金剛薩埵の性格が述べられている。新めて要文を掲ぐると次の如くである。

「意を自性 (manah svabhāva) とし、法界 (dharmadhātu) の別名をもつ」、「(四如来) は四蘊を本性とするが、阿閼 (とともに無自性なる識<蘊のみ> vijñānamātratāである) 金剛薩埵に刻印される」、「四瑜伽女 (四明妃) の中央には、金剛薩埵を本質とする主母、金剛界自在女 (Vajrad=hātviśvari) が住している。」^⑤、「五蘊とは五如来である。」「阿閼と金剛薩埵が同一 (である)」、「五 (蘊) の相が五如来を本性としているから、またその自性は空悲不可分であるから」^⑥「(六種灌頂は) 六如来を本性 (ṣaṭtathāgatasvabhāva) とするが故に不退転灌頂 [とも言う]。」、「般若智灌頂の語義解釈は“般若の知識”と“外的な般若<=女性>にして知識”とである。～四界、五蘊というかたち等の六境を本体とし、女性を本性とする知が般若であって～」^⑦。

ADV.Sに六薩埵・六金剛女の語を見出していない。しかし、上記抜からも「五蘊・五如来」、「阿閼・金剛薩埵同一の六如来」の金剛薩埵が、<六根>の「意」を自性とし、又、<五蘊>の「識」を本性とすること、配偶女尊「金剛界自在女」を伴うこと、<六境>を本体とする般若 (女尊、六明妃、六金剛女?) を説いていることがうかがえる。

上述「要略」等を経たSSは、六根、六根に対応する六薩埵、六金剛女を觀じ、身体のマンドラとして修し、持金剛・金剛薩埵を成就した。PANに述べる如く、五如来は僧形であり金剛薩埵は菩薩形である^⑧。菩薩<行>を修する自己に以た菩薩形の、即ち六薩埵を身体に透して、如来である金剛薩埵と瑜伽する。六根と六境をストレートに六如来と対したわけではなかった。即ち、SSの「六根・六境即六仏」説は、「六根・六境即六薩埵・六金剛女即六仏」説であったのである。

生起・究竟の兩次第に通じたADVにあって、PANに見られた第六仏・金剛薩埵との瑜伽は、「五蘊即五仏説」の如くに直接に修せられ得られたものではないと考えられる。六薩埵・六金剛女に配する六根・六境という思想が、その背景にあったはずである^⑨。次はこの一具体である。

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

PAN、五明妃の中尊「金剛界自在女」は、「要略」では阿閼の配偶尊・触金剛女(Sparśavajrī)⁶⁴とされ〈六境〉の第五〈触〉である。SSの六金剛女の第六名は、六境の第六〈法〉界金剛女(chos kyi byins)である。〈法界〉は即ち金剛界である。PANは、金剛薩埵が〈法界を自性〉としており、その自在女は直接にはこれによると考えられるが、ADVの知る「要略」に〈触〉金剛女が五明妃の一に列せられていることに従えば、SSの如く、六金剛女、六境の〈法界〉金剛女を経て「法界・金剛界自在女」が登場したと考えることが出来る。PANにおける金剛薩埵の配偶女尊・「金剛界自在女」は、阿閼の配偶女尊・〈触〉金剛女ではなくて、第六薩埵・普賢の配偶女尊、〈法界〉金剛女の転じた〈金剛界自在女〉であったと考えられる。

ADVのPANは、実習の成就法次第というより、自らの知識を要約した綱要書である。関係する別尊の成就書をSMに残す如く、第六仏・金剛薩埵の成就法が実習次第としてADVにあってしかるべきである。稿者はこれが、ADVの弟子養成時代にAnupamavajraと称讃されて残された当書「Suviśadasādhānopayika」であると考ええるものである。

最後に、四明妃・四大種字：SS、12、13、14、Lām̐, Mām̐, Pām̐, Tām̐について、稿者がADV著であると考ええるĀP、SSとADV著PAN、SM(所収)に見出され、特にSMにおいて一つの展開を示してADVと密接であることを記してその証としたい。

当種字が上記の書に出ずること、「秘密集会タントラ」五明妃を説く「要略」にも、「五次第」にも言及が無いという指摘のあることは既述した。SM、No.273は四明、No.159、No.3、はそれぞれ第五明にOm̐(阿閼の姿をした金剛薩埵の座)に供花する。No.251はKham̐を加えて五明種字とする。Kham̐は「空大」である。ADVのNo.251は阿閼の冠を付けた五煩惱である五明妃を説いている⁶⁵。これら四明、五明種字はNo.159を除いて六処布置(五処)として、六薩埵、六男・女尊(ṣaḍdevatā, devatī)との関係において説かれるものである。ADV、No.217は、明妃種字を欠いて同じく六男・女尊の六処布置を説いている⁶⁶。

ADVのNo.217、No.251が、六薩埵・六金剛女とその種子ではなく、〈六男・女尊〉とその種字眞言であるのは、両成就法の主尊がVajradākā、Vajravālāhīであることによるのである。

「Hevajrat Tantra」は、五仏・五煩惱・五大・五明妃を配している^⑦。SSは四明妃、四煩惱、四大を配して、上記SM・No.251は阿閼の冠を付けたDveṣa・Piśuna・īrṣya・rāga・mohaである五女尊（devatī）を説く。ADVが「Hevajrat Tantra」に通じていることはADV.S,KN.etcに明白であり、SMの五種字はこれとの関係の中で提示されたと考えられ、この種子が六根・六境・六薩埵・六金剛女との関係に於いて修せられている。彼がこのように六処布置の〈六男・女尊〉を説くことはSSの説く〈六根・六境〉と〈六薩埵・六金剛女〉の関係を明白に示しているものであると考える。

ADVにあって、四明妃、四大種字は五明妃五大種字と展じてPAN、ĀP、SS、SMに、一貫しつつ、第六仏・金剛薩埵の配偶女尊の姿を求めている如くである。

ADV.Sに西藏訳「ナーガルジュナガルバ大師」著とされる「四印決定」^⑧に、次の如く言うのは、ADVの行学の具体を的確に示しており、爾来考察してきたPAN,ĀP,KN,SSの、ADVにおける位置をも示唆するが如くである。

そして阿闍梨達は、その三昧那印を摂受けして輪の相で五種の智を五種（の三摩地）に分ける、（すなわち、大）円鏡（智）、平等性（智）、妙觀察（智）、成所作（智）そして清浄法界（智）によって、（それぞれそれらに対応する）初瑜伽、曼荼羅最勝王、羯磨最勝王、滴瑜伽、微細瑜伽によって三昧那印の輪^{チャクラ}を修得する。これによって彼ら（阿闍梨）は福德を得る。然るにそれにより法印の果（大印）を獲得した者とはならない。

1995. 8.

（註）

1. H.P.Shastri, "Advayavajrasaṃgraha" "Kudṛṣṭinirghātana", Baroda, 1927, G. O.S. vol. 40
密教聖典研究会「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳（1）—」

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

“I. Kudrstinirghatana、悪見破斥” 大正大学総合仏教研究所年報10号、S.63刊
(以下綜仏年報)

同著作集は同研究会によって既に和訳が完結されている。当論考の作成にあたって全和訳を参考し得たことに感謝を表するものである。以下に引用する同文献の訳文、テキストは全てこれに依っている。

2. 綜仏年報、10号、KN、P.10。

vakṣye kudrṣṭinirghātam ādikarmavidhānataḥ
anenaiva vihārena yatnena labhate padam // 1 //

3. 綜仏年報、10号、No.1・KN、P.11、13、15。

4. 綜仏年報10号、No.1・KN. PP. 20-21、次註 5. 高橋 ĀP 和訳、P.578、同、SKT、校訂、P.147-148。

utpādayāmi varabodhicittam
nirmantrayāmy ahu sarvasattvān /
iṣṭām cariṣye varabodhicārikām
buddho bhaveyaṃ jagato hitāya //17//

我は最勝なる菩提心を發起せん、我は一切衆生を招請せん、望ましき最勝菩提行を我は行ぜん、世を利せんがために我、覚者とならん。17)

KN、ĀPにあって当菩薩の誓願(文)は後出7、8註の内容「全ての瑜伽者の初業」と言う如く、徳目；五戒、十善業etcと共に大乘菩薩行者の「初業」として必須の徳目であるとされている重要な主張である。

KN、ĀPの徳目、日課業次第の要点は「成就法」等の次第とも重なり、一つの定型を示している。('Sādhana-māla' No.123、No.128、No.98、No.82、No.24.etc) 当誓願文も、同成就法No.51、No.80、No.142、No.182、etcに出ずる。

5. Louis de la vallee Poussin, "Ādikarmapradīpa", Bouddhisme, Études et Matériaux, London, 1898.

高橋尚夫、「アーディカルマプラディープ『初行のしるべ』一和訳」

興教大師八百五十年御遠忌記念論集「興教大師覚鑊研究」春秋社刊、H.4。

同上、「Ādikarmapradīpa梵文校訂一東京大学写本による」

インド学密教学研究一宮城宥勝博士古稀記念論文集一法蔵館刊、H.5。

猶、高橋氏両者には、内容について科段、項目が付せられている。私は、平成五年一月、大正大学仏教文化学会に於いて「ネワール仏教の出家得度式pravrajyāvidhiを中心として」を発表し、当稿の主旨を付した。同じ頃、氏の和訳を拝受したが、自らの論不備で現在に至った。今回氏の訳著を引き、参照を得たことに謝意を表するものである。所引については同氏名を記した。

- 6-6. 綜仏年報、12号「Mahāyānaviṃśikā」P.75、注1。西藏文帰敬に「胎蔵身 (sñiñ po [D.pohi] sku) に帰命す」と言う。

綜仏年報、11号「Caturmudrāniscaya」梵文帰敬に「金剛薩埵に帰命」(西藏文、文殊)P.93。奥書蔵文著者名、slob dpon chen po klu sgrub sniñ po (Mahācārya Nāgārjunagarbha) <猶、当書はNāgārjuna仮托書ともされる。羽田野、次書、P.304>

羽田野伯猷、「Tantric Buddhismにおける人間存在」東北大学文学部研究年報(第九号)、P.304。

タントリックの仏教者名、年代の比定、同定をめぐって「問題をこの聖父子の Guhyasamājaにおける龍樹父子に限っても事情は複雑である」と各具体を究明される。

宇井伯寿、「Advayavajra Tattvaratnāvali」真理の宝環」

名古屋大学文学部研究論集III、哲学I、1952、P.38

吉祥な金剛薩埵に帰命する。金剛薩埵の蓮華の如き両足を敬礼して、

吾々は秋の月の如き無垢の光を有する真理宝環を述べる。①

初業の衆生を勝義に入らしめんが為に、実に、
この方便が正覚仏によって、階梯の如くに、作られたのである。^{②7}
竜樹論師も亦いう、
法界には別異が無いから、主よ、観法の別異もない、
三乗は衆生の最高へ入るものとして、汝によって、説かれたものである。^{②8}

同書、帰敬は金剛菩埵である。P.30。

7. 綜仏年報10号、KN、P.13。

8. 綜仏年報12号、「Mahāyānaviṃśikā」、P.79。

9. 綜仏年報10号、KN、P.15。

「初業の菩薩」(Ādikarmikabodhisattva) について、ibid.L.V.poussin,
“Bouddhisme” PP.177-183に言及がある。

酒井眞典「チベット密教教理の研究」高野山出版社、S.31によれば次の如く言う。

「pañcakrama」(五次第)(二)心清浄次第、P.200-1、204。

51 生起次第を具して真言者は常に行ぜん。

正しく具吉祥(秘密)集会等に於て夫々に広大に説かれたるの

52 凡そ観の(次第)と相応したるその間、初業者(Ādikarmika)なり。

次は究竟瑜伽の秘密を釈すべし、所謂

78 此等の底級なる真実によりて禁戒を行ずる等の次第

真実智底級なるが故にこの故に解説を得ること不能なり。

79 初業の瑜伽者は八地を得ん

三顕明によつて現見する者達は十地によく住す。

初業の瑜伽者一生起次第行者、三顕明現見者一究竟次第者。

ibid、酒井、P.7-8、Atiśa「真言道次第」の文。

二次第を修する過程に於て通過すべき心性の状態は如何と云ふに阿底沙
(Atiśa) 尊者が

晨朝に起きて前の如くよく念誦することは初学地(Ādikarmika)なり

本尊智少しく入りて真言の戒と禁戒を具する者は

眼と身等を加持せよ四時の間よく努めて誦ぜよ…

と示されてゐる如く初学と智入と本尊智小得は生起次第にして、本尊智正得と
有情の利をなすことは究竟次第を指してゐるのである。

同、P164、「有学無学」について

佛智足系に於ては、生起次第の本尊身を真言身(Snags-kyi-sku)とし、究竟次
第の本尊身を智身(Yes-ses-sku)となし、その智身を更に智身と清浄身(Rnam-
dag-sku)とに分つ。このことは聖龍樹系の幻身と清浄なる有学、無学の双入
の二身に分けて説明すると同じである。

10. 羽田野伯猷、「A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of
Tāntric Buddhism in India」—Advayavajra, alias Mñah-bdag Maitri-pa—チベ
ット・インド学集成、第三卷、法蔵館、S.62。①PP.168-169、②PP.170-171。

11. 綜仏年報、13号「Svapnanirukti」(No.12) P.71。

同頁、注6. Tib「自らの知識と師の言葉と殊勝なる聖教によって知れ」

12. 綜仏年報、12号、No.11 P.53-54

13. 羽田野伯猷、「密教者としてのアティーシャ」チベット・インド学集成、第三卷、
P.209。

奥山直司、「ある聖者の伝説—アドヴァヴァジュラ伝《Amanasikāre Yathāśruta-
krama》に見える修業者像—」東北大学印度学講座六十五周年記念論集、P.471。

ネパール伝承のADV伝ADVのピクラマ出奔の記事がある。ADVの諸名が記される。

14. Ibid、13、羽田野

P.210「アティーシャがチベットにおいて秘密眞言母タントラによって趣生の義をなし
ている、と言う悪評がインドにまで弘まった。」

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

- P.212「秘密・般若両灌頂を梵行者はうけるべきではない。…かかる第二秘密、第三般若、第四灌頂を如何に対処すべきかという問題は、アティーシャばかりでなくしばしばインド密教においてあげられた課題である」。ADVに於いてもしかりである。次註、cf.
- 「…学処を破る」、同「衛へのアティーシャ招請」P.246。「波羅提大叉の要否」etc同上、P.248。
15. ADVの「大印の行」について、その弟子達によるチベット、ネパールにおける盛行が伝えられている
George N. Roerich, 「The Blue Annals」XI. The Mahāmudrā, P839-867.
綜仏年報11号、No. 9、「Sekatātparyasaṃgraha」第二、第三灌頂を次の如く説く。
〔弟子を〕般若と信〔を育くむ〕田地となすために、また本誓を護らせるために、同時に〔男女〕双方より生みだされた菩提心を与える〔という〕のが、秘密灌頂である。般若〔すなわち女性〕と方便〔すなわち男性〕の双方の秘〔技〕により与えしめられるべきである、というのが〔「秘密」ということの〕語義解釈である。
〔第三番目の灌頂は〕般若智〔灌頂〕と〔言うが〕これに対しては二通りの語義解釈がある。
「般若の知識」と「外的な般若（＝女性）にして知識」、とである。このうち、対象と主体という〔二元的な〕形象を保持し、四界・五蘊といろかたち等の六境を本体とし、女性を本性とする知が般若であって、その〔菩提心を生じる〕原因となっている〔般若〕を菩提心として知ることである、というのが、前者の語義解釈である。
その同じ〔般若〕が、〔主客の〕二形象を欠いており、〔勝義の〕認識である、というのが、後者の語義解釈である。
16. 綜仏年報、10号、KN、P37。
41) この初業を行じて、我によりて善福は得られたり。
この初業を行して、（諸々の）衆生は勝利を得よかし。
17. 綜仏年報、13号、No. 7 「Sekanirdeśa」
18. 綜仏年報、12号、No.15 「Yuganaddhaprakāśa」
19. 同上 No.16 「Mahāsukhaprakāśa」
20. ibid. L.V. Pussin 「Ādikarmapradīpa」による。
21. ibid. 10、羽田野P.167。
22. ibid. 15、XI 「The Mahāmudrā」
磯田熙文 「Pāramitā-yānaとmantra-yāna」
23. Hemrāj Śākya. 「Śivadeva Saṃskṛita Śrī Rudravarṇa Mahāvihāra sthita Tālapatra-abhilekha」, Patan, 2524, BS
Documents No.5 「śrī(parini)rvāṇa-mahāvihāra-Ācārjja(rya)bhikṣu…」
No.16, Saṃvat.262. (AD.1142)
「śrīmanokṛjaiva(?) mahāvihārādhivāsino śākya-bhikṣu-vajrācārya-śrīharṣendra-budhi-nāmnah」
SM.No.272の著者Gunākaraguptaは「Paiṇḍapātika Bhikṣu」であった11c.の密教者である。
24. Locke. John.K. 「The Unique Features of Newar Buddhism」 in The Buddhist Heritage Buddhica Britannica series Continua 1. Edited by Takeusz Skorpuski, The Institute of Buddhist Studies, Tring U.K., 1989.
cf. P.99, P.105. Lockeは、上記HemrajのDocument（最も早い年代のものはsaṃvat.103 <982-3AD>を含む）etcによる、当代に初まるネパール仏教の「世俗化」を説き、ネパール仏教（史）についての仮説を述べている。「独身主義の声聞乗の形態が金剛乗の進展と優勢に伴って、衰退してゆき、声聞の独身僧は独身のあり方を捨て結婚の形をとるようになった、即ち結婚した出家者「梵行比丘」となった。現在のŚākya種性のŚakyabhikを名のる者達は、かつて独身僧であったという伝承を今に主張している

- のである。」
25. 後註42.cf.現代ネパールの仏教の有り方、儀礼の根底、出家得度式etcにおいて、ĀPと特にその「Merumaṇḍala」即ち「Gurumaṇḍala」の重要性を指摘できる。別稿「ネパール仏教と出家得度式」予定。
 26. B.Bhattacharya, 「Sādhanaṁāla」, Oriental Institute Baroda, 1968. No.251. (Advayavajra)
advayenādvayaṁ kṛtvā yat saptākṣarasādhanaṁ/
śuddhaṁ labdhaṁ śubhaṁ tena loka'stu cakrasaṁbarah//
 27. マンダラの形態に基づいたネパールに於ける呼称。
 28. ibid.5. 高橋訳、P.576.()は森口。猶、上記、五如来表も提示されている。
PP.553-4。
 29. 後述、注No.38、頼富所収(注27)
「『五仏の形相』の記述のみからではVajrasattvaの位置は明らかでない。」
 30. ibid.5.高橋訳、18「師の曼荼羅建立の事由」PP.569-572。
綜仏年報10号、KN、PP.22-25の「マンダラ讃嘆の偈」と「(以上がマンダラの)讃嘆である」<ĀPによりて、「グルマンダラの讃嘆」に訂正>とはĀPの高橋訳(18)に相当する。
 31. ibid.高橋訳、P.573.20「器界観」
 32. ibid.30註、cf。
 33. 綜仏年報11号、No.10「五(如来)の形相」
頼富、後註38、所収「校訂梵文と和訳」S.52. 10刊
 34. 綜仏年報10号、No.6「五如来印についての解説」
 35. 綜仏年報11号、No.9「灌頂主旨綱要」
 36. 後述、注、38、P.442。
 37. 後註67.cf.
ibid.17.
(24)「笑い」などの清浄〔なる本質〕により、「阿闍梨」など〔の灌頂〕において〔各々の段階で獲得することが〕望まれているもの、それを生起〔次第〕によって確立すべきである。究竟を本性とする〔次第に〕基いてではない。
ibid.19.
(1)般若と方便を自己の本質とする金剛薩埵に帰命して、大樂と不二なる事物の真理を、私は要約して説こう。
(2)一つには生起〔次第〕の修習があり、第二には究竟(次第)の修習がある。それ故に〔生起次第と究竟次第の〕両者の修者を、私はここで説こう。
 38. 頼富本宏「アドヴァヴァジュラの『五仏の形相』に見る五仏説」
「秘密仏の研究」法蔵館、1990刊、所収。
 39. 同上、PP.437-442。
 40. ibid.26, SM, No.3, P.18, No.159, P.322, No.251, P.492, No.250, P.488, No.273, P.544.
No.251は次節IIIと関係するが、「khaṁ」を加して五明妃の種字となる。
ibid.5, Pussin, P.199は〈Lāṁ Māṁ Yāṁ Bhāṁ〉とし、
同、高橋, SKT, 和訳(P.576), 綜仏.No.11号、10「PAN」, PP.132-3(注4.cf)は、Lāṁ Māṁである。
ibid.38.頼富、P.440, 「SM」の全ては〈Lōṁ Māṁ〉である。仏眼母Locanāに従い〈Lōṁ〉とする。後述「SS」はLāṁである。
 41. 「Caryāgītasamgraha」
cf.森口光俊「A Catalogue of the Buddhist Tantric Manuscripts」in the National Archives of Nepal and Kesar Library, No.161。
以下、CGはネパールの故Vajracārya Āśākāji所蔵本に依る。

Advayavajraは尊称Anupamavajraか

- 「Buddhist Ritual Dance」, Kalamandapa, Kathmandu, Nepal, 1986. に Ratnakaji Vajrācāryaによって、テキスト部分訳が出されている。
42. Vajrācārya Āśakāji, 「Gurumaṇḍalārcana pustaka」, yala athananibāhā, lalitpur, Ne, Saṃ. 1109.
同書は、およそĀPと内容を一にするMerumaṇḍalaに関する供養の儀式次第である。氏は同書をAdvayavajraの作としている。氏の指摘するADVの7歌は以下の如くである。
1. Madhya Meru, 2. Ciyam jogi, 3. Dvādaśa pāramitā, 4. Hariharihari Vahan Lokeśvara, 5. Jatādhari Lokeśvara, 6. Nirvānāmbuja, 7. vajradhara.
「Madhya Meru」は、現代ネパールのVajracarya達の諸儀式に於いて、その基本行と捉えられている「Gurumaṇḍala」の供養法に唱えられ、Ādibuddha vajrasattvaへの供養であるとされている。
- 「CG」所収の主たる成就者名は次の如くである。
Śāntikarācarya, Paramādivajra, Suratavajra, Siddhivajra, Anupamavajra, Hāsa-kuliśa, jinasiddhi, Advayavajra, Vandudatta, Nāropasiddha, jālaṃdharipāda, Karṇapa, Vākvajra, Godaripāda, Kuladattācārya, Kuliśavajra, Harṣaṇṛsiṃhava-jrācārya, Luipa, Karṇapāsiddha, Līlavajra, Pravanavajra, Virūpāsiddha, Goḍārivajra, Dārukasiddha, Samantabhadravajra, Jāmanācārya, Bhāskaravajra, Kānhapasiddha, Gaṇeśavajra, etc.
43. PP. 490–491.
44. ibid 頼富、P. 439.
45. 高橋尚夫「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現 第一瑜伽三摩地品一和訳」
堀内寛仁先生喜寿記念「密教文化論集」高野山大学、平成元年刊、PP. 666–5.
46. PP. 492–493, ADV. No. 217も同様である。後註66. cf.
47. MerumaṇḍalaはADVから「大印の秘法」を伝えられたと言われるMar paによって、カーギュッ派の重要な前行、グル供養として伝えられている。田中公明「チベット密教」春秋社、1993. P. 228.
ネパールに於いては、ĀPから、「kriyāsaṃgraha」, 「Ācāryakriyāsamuccaya」を経て現在に伝えられた儀式として重要な位置を占めている。森口「Ācāryakriyāsamuccaya 灌頂（品）テキストと和訳（I–1）」牧尾良海博士喜寿記念需佛道三教思想論攷、山喜房、平成元年。同書はĀPのMerumaṇḍalaに係る部分を収めている。
猶、ibid. 9. 酒井、P. 122「六次第」の第一次第たる「定寂身次第」において、四界のうち「地界」に須弥山と四州、五仏を配している。
48. ibid. 9. 酒井真典西藏文和訳、所収。
Louis de la Vallée poussin, 「Études et texts tantriques, Pañcakrama」Gand, 1896.
49. ibid. 38. 頼富、P. 346、注、5)
50. 松長有慶、「秘密集会タントラ校訂梵本」、東方出版株式会社、1978。
51. ibid. 38. 頼富、PP. 319–20。
52. 同上、頼富、P. 326, cf. P. 330、注50, 51. 五種字については同PP. 367–8、猶SM、No. 273、(P. 544) 出。
53. ibid、酒井、PP. 119–127。
54. 田中公明、「マンドライコノロジー」、平河出版、PP. 196–7。
55. 同上、田中、P. 192。
56. ibid、酒井、P. 33、普賢Saṃ、地蔵Thiṃ、弥勒Maiṃとあり、他はOm hūṃ (āḥ) である。ibid、SM、No. 83は四種のkṣiṃ, yāṃ, khāṃ, skāṃ, No. 3、No. 251、No. 273に出ず。No. 280 (P. 557) 種子と六薩多名と布置処が記される。
kṣiṃ jaṃ khaṃ laṃ skaṃ saṃ
bījasambhūtāḥ kṣitigarbhavajrapāṇikhagarbhalokeśvaraviskammbhisama(n) =

- tabhadranāmānaścakṣuṣi karṇe ghrāṇe jihvāya stānayoś ca nābhau ca
57. ibid、頼富、P.367—8。
 ibid、26、SAM、No.110(P.232),No.271(P.537),No.273(P.544)
 cf.No.217(P.426),No.251(P.492)
58. ibid、頼富、P.369。
59. ibid、綜仏年報、11号、No.10、PAN、P.127,P.131,(No.6,P.47),No.135,(P.123)
60. ibid、綜仏年報、10号、No.6、P.47,P.49,P.55。
61. ibid、綜仏年報、11号、No.9、P.109,P.111,P.119。
62. ibid、綜仏年報、11号、No.10、PAN、P.123。同書には金剛薩埵の形相については記さない。cf.ĀP「Gurumaṇḍala」観想
63. PANの金剛薩埵は一面二臂である。ibid、11号、No.10、PAN、P.127。
 PANがSSの後に書かれたことを意図するものではない。
64. ibid、頼富、P.342。
65. idid.SM、No.251、P.493
66. (A)No.159 (P.322)、五如来種字：Huṃ Om Trāṃ Hriḥ Om-Khaṃ
 五明妃種字：Loṃ Māṃ Pāṃ Tāṃ Om (Akṣobhyasthāne)
 (B)No.3 (P.18)、五如来種字：Huṃ Om Trāṃ Hriḥ Khaṃ
 五明妃種字：Loṃ Māṃ Pāṃ Tāṃ
 (Om?, Akṣobhyarūpavajrāsanāya)
 六種字、六色、六処：二眼・Kṣiṃ(śukla)、二耳・Jaṃ(nīla)
 二鼻穴・Khaṃ(pīta)、舌・Gaṃ(rakta)、
 額・Skāṃ(śyāma)、両乳・Saṃ(śukla)
 No.4(P.23),No.5(PP24-5)同上、身色を異にする。
 (C)No.251(P.492)≡No.250(P.488)、No.253(P.498)
 五代守護種字：Loṃ Māṃ Pāṃ Tāṃ Khaṃ
 五蘊淨化眞言：Om Āḥ Hriḥ Hoḥ Hūṃ Hriḥ
 六処淨化眞言：Brūṃ Hūṃ Khaṃ Āḥ Hāṃ Hāṃ
 六尊六処被鎧眞言：Om Haḥ(心)、namaḥ Hīḥ(頭)、svāhā
 Huṃ(髻)、He(二肩)、Huṃ Huṃ Hoḥ(二
 眼)、Phaṭ Huṃ(一切支分)
 六女尊六処被鎧眞言：Om Vaṃ(脐)、Hoṃ Yoṃ(心)、Hrīṃ
 Moṃ(口)、Hraṃ Hrīṃ(額)、Huṃ Huṃ(頭)、
 Phaṭ Phaṭ(一切支分)
 ※P.494.五種字：Buṃ Āṃ Jiṃ Khaṃ Huṃ
 =No.268(P.529)、No.269(P.530)、No.270(P.532)、No.271(P.567)
 (D)No.217(P.425-6)、六尊(種字)による覚醒：Brūṃ Huṃ Khaṃ Āḥ Doṃ Daṃ
 六女尊六処被鎧眞言：Om Vaṃ(脐)、Hoṃ Yoṃ(心)、Hrīṃ
 Moṃ(口)、Hreṃ Hrīṃ(額)、Huṃ Huṃ(頭)、
 Phaṭ Phaṭ(一切支分)
 (E)No.273(P.544)、六根布置：Kṣiṃ Jaṃ Khaṃ Gaṃ tathā Kṣaṃ Saṃ Raṃ
 六境布置：Jaḥ Huṃ Vaṃ Hoḥ tathā Khaṃ Raṃ
 四大淨化：Loṃ Maṃ Pāṃ Tāṃ
 五蘊淨化：Buṃ Āṃ jiṃ Khaṃ Huṃ
67. ibid、頼富、P.391—3。
68. 綜仏年報、11号、No.8「Caturmudrāṇiscaya」、P.105。